

松翠深く蒼浪遙けき逗子より

泉鏡花作

大正四年八月

櫻山に夏鶯音を入れつゝ、岩殿寺の青葉に目白
鳴く。なつかしや御堂の松翠愈々深く、鳴鶴ヶ崎の
浪蒼くして、新宿の濱、羅の雪を敷く。そよ／＼と
風の渡る處、日盛りも蛙の聲高らかなり。夕涼みに
は脚の赤き蟹も出で、目の光る鮎も顯る。撫子はま
だ早し。山百合は香を留めつ。

月見草は露ながら多くは別荘に圍はれたり。野の
花は少けれど、よし蘆垣の垣間見を咎むるものな
きが嬉し。

田越の蘆間の星の空、池田の里の小雨の螢、いづ
れも名所に數へなん。魚は小鯪最も佳し、野郎の口
よりをかしいが、南瓜の味抜群也、近頃土地の名物
に浪子饅頭と云ふものあり。此處の中學あたりの若
殿輩に、をかしき其かけ知らせぬが可かるべし、と

思おもふこそ尚なほをかしけれ。